



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2570号 2015.8.5 発行

「手作り魅力」人気ギフト 障害者が中心、横浜の会社 東京新聞 2015年8月5日



障害のある社員が作ったギフトをPRする宇田川社長＝横浜市港北区で

全社員九十六人のうち、七十五人が障害者の会社「日総びゅあ」（横浜市港北区）が、市内の有名菓子メーカーと連携して「サマーギフト」を販売し、人気を得ている。地域貢献と障害者の給料上昇を狙って二〇〇九年に取り組みを始め、売り上げは発売時の七倍に増えたという。

同社は人材派遣業「日総工産」の関連企業で、障害のある社員の人数が親会社の障害者雇用率に参入される「特例子会社」。多くの場合、特例子会社は親会社から仕事を受注して売り上げを確保するが、日総びゅあの宇田川利保社長は「親会社の業務の性質上、任

される仕事はあまり多くない」と話す。

そこで、業務拡大のため、紅茶にハーブを混ぜた七種類のハーブティー「びゅあたいむ」を製造、販売する。「ハーブだけだと口当たりが強いが、紅茶を混ぜて飲みやすくした」と宇田川社長。普段からこの商品を販売しており、夏や冬になると他社の商品と抱き合わせで、「ギフト」として売り出す。

これまでに「ハーバー」で知られる「ありあけ」や、「横浜三塔物語」などの土産菓子を販売する「三陽物産」などの協力を得てギフトを販売。当初の販売数は三百セットだったが、去年は七倍まで増えた。今年は霧笛楼のプリンなどを入れたものなどを用意した。

ギフトは四種類で二千百六十円から。宇田川社長は「社員が心を込めて作った。手作りの魅力を感じてほしい」と話している。問い合わせは、日総びゅあ＝電045（470）3920＝へ。（志村彰太）

【知恵の経営】障害児も分け隔てなく保育

Sankeibiz 2015年8月5日

□法政大学大学院政策創造研究科教授、アタックグループ顧問・坂本光司

少子化の影響をもろに受け、大都市圏・地方圏を問わず、幼稚園の経営は年々厳しくなっている。事実、1992年当時、1万4801園であった幼稚園数が、2013年では1万3043園となっている。この20年間で約1800園、率にして12%もの幼稚園が閉鎖されている。

こうしたなか、全国の関係者から注目されている幼稚園がある。その名は池谷学園富士見幼稚園（横浜市港北区）。東急東横線綱島駅から徒歩3分ほど行った商店や事務所・住宅が林立する街中にある。その規模は年少・年中・年長児あわせ180人強、スタッフの数も園長以下、保育者・事務職員などで約15人という小さな幼稚園だ。

同園が関係者から高い評価を受けている訳は、保育の考え方と仕掛け・仕組みづくりにある。保育の基本的考え方は、3つに要約できる。

1つは統合保育。2つは縦割り保育と横割り保育の組み合わせ。3つは体験保育である。

この3つのなかで、とりわけ注目すべきは、第1の統合保育である。これは障害児も健常児も分け隔てなく受け入れ、同じ教室で学び遊ぶという保育だ。各クラスで1、2人、全園児の1割程度は毎年、知的・身体に障害のある園児がいる。

資料によると、全国の幼稚園で障害児がいる園は約20%。園全体で平均1、2人という実態から見ても、同園の取り組みは見事である。

これは、2代目園長である玉川弘氏が統合保育が健常児や障害児はもとより、社会にとってもより良い育て方になると、強い意志で推進しているからだ。ここまで来る道のりは、健常児の母親の反対や心ない人々からの誹謗（ひぼう）中傷もあり、苦労が多かった。

しかし、今や障害児や健常児を問わず、関係者から高い評価を受け、片道40分もかけて、わざわざ同園に入園をしに来る園児も増えているという。それは同園を卒園し、小学校に入学した子供たちの言動が、関係者を驚かせているからである。

紙面に余裕がなくなったので、そのエピソードを一つ紹介してペンを置く。ある小学校の運動会の練習のとき、障害を持った小学1年生が走っていて転倒した。そのときすぐに駆けつけ、起こしてあげた2人の子供がいた。あまりの素早い対応に驚いた先生は「なぜ、あなたたちはそこまでしてくれたの」と聞いた。すると、その2人は「幼稚園でも、いつもやっていたもん…」と当たり前のように答えたという。

木下大サーカス公演、福祉招待券を贈呈

栃木県と宇都宮市に各3千枚



下野新聞 2015年8月5日

10～12月に「木下大サーカス宇都宮公演」（下野新聞社主催）を開催する木下サーカスの木下（きのした）唯志（ただし）社長と下野新聞社の赤坂信行（あかさかのぶゆき）取締役販売・事業担当らが4日、県庁を訪れ、福田富一（ふくだとみかず）知事に県内の福祉施設入所者らへの無料招待券を3千枚贈呈した。

県は招待券を県内の児童施設や障害者施設、高齢者施設、特別支援学校などに贈る予定。また両社は同日、宇都宮市にも福祉招待券を3千枚贈った。

木下大サーカス宇都宮公演は10月9日～12月7日まで、宇都宮市の清原工業団地特設会場で開催される。

問題の施設でまた…職員が入所者を転倒させ軽傷

読売新聞 2015年08月04日

職員が入所者にけがを負わせたなどとして、東京都から新規利用者の受け入れ停止処分を受けた知的障害者支援施設「たんぼぼ」（西東京市）で新たに今年6月、男性職員（56）が入所者の男性（45）を転倒させ、軽傷を負わせていたことが分かった。

同施設は「再発防止を徹底する」と説明している。

同施設などによると、男性職員は6月17日朝、入所者の男性がドアに頭をぶつける行為をやめさせようとした際に転倒させ、首に約4センチのひっかけ傷を負わせた。同施設は事実を都に報告し、この職員を自宅待機処分とした。

同施設には現在、知的障害者45人が入所。都は2013年9月と14年9月の2回、障害者総合支援法に基づき、新規利用者の1年間受け入れ停止を命じている。

虐待母へ 「気持ちの制御」講座開催

読売新聞 2015年08月05日

子どもに暴力を振るったり、暴言を吐いてしまう母親の相談に乗り、気持ちをコントロールする方法を教える講座「マイツリー・ペアレンツ・プログラム」が9月から始まる。東京、神奈川、栃木で開催される。

親自身も、子どもの頃に親から大切にされなかったなど問題を抱えていることが多いため、親の心に向き合い、自らを肯定することや、子どもとの関わり方を教える。

東京では2年前から、児童養護施設を出た子どもたちの相談所「ゆずりは」(東京都小金井市)が主催し、読売光と愛の事業団が助成してきた。昨年のプログラムには10人が参加。参加者からは「娘を大切な存在と感じられるようになった」「子どもに手を上げなくなった」などの声が寄せられている。

対象は母親で、全13回。参加無料。各会場とも定員10人。東京は9～12月の火曜午前、宇都宮市は同期間の木曜午後、神奈川県海老名市は11月～来年3月の土曜午後で開催予定。参加希望者には事前に面接が行われる。

申し込み、問い合わせは東京会場は、ゆずりは(042・315・6738)、栃木会場はNPO法人だいじょうぶ(0288・21・2119)、神奈川会場はグループ・ナイス(080・5450・6335)へ。

[大弦小弦]ダメな子とか、わるい…

沖縄タイムス 2015年8月5日

「ダメな子とか、わるい子なんて子どもは、ひとりだっていないのです。(略) そんなふうに見ることしかできない大人たちの精神が貧しいのだ」。漫画家の故手塚治虫さんは著書『ガラスの地球を救え』(光文社)で、子どもの内面に大人が目を向ける必要性を問う ▼3歳の幼い命が父親に奪われる悲劇が起きた。多くの大人が関わりながらも「SOS」は見逃された。心が痛むと同時に、あらためて大人の役割を考えさせられる ▼以前取材した医療機関で、虐待の可能性や潜在的リスクを抱える家庭が県内に多いことに愕然(がくぜん)とした。若年出産や貧困世帯などの高いリスクもある ▼危険信号を逃さないよう相談体制を強化した看護師は、表には見えづらいが虐待につながりかねないケースも少なくないといい、日ごろから、この現状を知ってほしいと訴えていた ▼米国の虐待研究の専門家レノア・E・ウォーカーさんは、著書『バタードウーマン』(金剛出版)で指摘する。「家庭は外の世界から守ってくれる避難所であり休憩所であってほしいという期待は間違っている」 ▼虐待を防ぐ初期段階として、市民教育や地域の支援体制は重要だ。おせっかいや目配り、関心を持つ。できることはある。手塚さんは言う。「子どもたちがはばたくために大人は力をふりしぼらなくてはなりません」。(赤嶺由紀子)

小4の1割、おじさん化?…肝機能・脂質に異常

読売新聞 2015年08月05日

小学4年生を対象に、香川県が昨年行った血液検査で、肝機能、脂質、血糖値の異常値を示した子どもの割合が、それぞれ1割に上ることが分かった。

食生活や運動不足の影響が大きいとみられ、研究者は全国調査を求めている。

調査は同県の17市町のうち、小学4年生の採血を行う16市町が対象。保護者が同意した8264人(全体の約96%)について、肝機能、脂質、血糖の検査値を集計した。肝機能は、肝臓の負担が増すと数値が上がるALTなど3項目を調べた。このうち一つでも異常値を示した割合は男子12・4%、女子9・5%だった。

総コレステロールや、中性脂肪などの脂質が異常値となった子どもは男子10・2%、女子11・5%。高血糖状態が続いていることを示す「HbA1c(ヘモグロビンエーワンシー)」の高値は、男子12%、女子10・9%だった。各検査項目の小児基準値は、国内の研究や医師の意見を基に、同県が設定した。

注意力や落ち着きのない大人…漫画で知る大人のADHD 産経新聞 2015年8月5日

製薬会社、日本イーライリリー（神戸市）は、注意力や落ち着きのなさが特徴の「注意欠陥多動性障害（ADHD）」に悩む大人の日常を知ってもらおうと、漫画冊子「ブラックジャックによろしく 大人のADHD編」を制作した。著作者、佐藤秀峰さんの許諾を得て素材を活用した。ADHDは子供の障害と見られがちだが大人にもある。当事者は家庭や職場でミスを重ね、周囲の信頼を失うなどの困難に直面するという。漫画は会社員や主婦ら4人の悩みを紹介。診断がつき生活の工夫などで悩みを緩和するまでを描いた。インターネット（<http://adhd.co.jp/otona/shoujou/>）で公開中。

性暴力被害 急がれる“ワンストップ支援センター” NHK おはよう日本 2015年8月4日



阿部「こうした被害者は、自分で警察や産婦人科などを探し歩き、そのつど被害の状況を説明しなくてはなりません。被害を受けたあとも、つらい思いを何度も口にするようになります。そこで国が今、全国に設置を進めているのが、『ワンストップ支援センター』と呼ばれる相談窓口です。必要な支援機関の紹介や連絡を一手に引き受けるため、被害者の負担を減らすことができます。性暴力の被害者が減らない中、こうした支援センターの整備を急ぐことが強く求められています。」

和久田「性暴力の被害が一向に減っていません。警察庁によりますと、去年（2014年）の強かんと強制わいせつの認知件数はあわせて8,600件あまり。しかし、誰にも被害を打ち明けることができない人もいるため、実際の数はさらに多いと考えられています。」



女性は、すぐに警察に行き被害を届け出ましたが、長時間の取り調べで心の傷はより深くなったといいます。

30代女性「数時間前にわけもわからずレイプされたっていう記憶が、何度も話すことによって頭の中に焼きついていく感じがあった。」

その後、女性は産婦人科へ。病院では妊娠を

性暴力被害 繰り返される苦悩

愛知県に住む30代の女性です。11年前、車に乗り込んできた見知らぬ男に、ここで暴行されました。

30代女性「人としてではなく、物のように扱われるような、そういう時間だった。ものすごく孤独で、恥ずかしいし、惨めだし、自分なんていなくなればいいのに。」



さける処置などとともに、証拠採取が行われました。結果を伝える医師の思いもよらない言葉に、大きなショックを受けました。

30代女性『精子がうじゃうじゃいたよ』って言われた。その言葉を聞いたとき、本当に自分が汚い人間だとすごく焼きついたというか、性被害にあったそのものと同じくらいトラウマになって、ものすごく苦しんだ。」



こうした二次被害を食い止めるため、ワンストップ支援センターでは、希望があれば支援員が同行し、被害者にかわって状況を説明す

性暴力被害 二次被害をどう防ぐ

性暴力の被害を受けた後、支援を求めた先の心ない言動で逆に深く傷つけられてしまう「二次被害」。これが原因で、誰にも相談できなくなってしまふ被害者もいます。



ることもあります。

3年前開設された、東京都内のワンストップ支援センターです。対応するのは、性暴力被害への対処方法に詳しい専門の支援員。24時間電話を受け付けています。

センターに通っていた女性「お久しぶりです。」

このセンターに通っていた女性です。2年前、社員旅行の宴会で酒を飲まされ、酔ったところを取引先の男性に暴行されました。会社に被害を訴えたところ、思わぬ形で自分が責められました。

センターに通っていた女性「私が逃げなかったのが悪いとか、会社の旅行を乱した私が悪いから責任とれとか。」

センターのホームページを見つけ、すぐに駆け込んだ女性。はじめて自分の気持ちを理解してくれる人に出会えたといいます。

センターに通っていた女性「手を握ってくれて、私は悪くないよって言ってくれた。すごく涙が止まらなくて。味方になってくれる方がいることがすごくうれしかった。」

検査項目	検査日
<input type="checkbox"/> 梅毒血清反応	／
<input type="checkbox"/> HBs抗原 (B型肝炎) 検査	／
<input type="checkbox"/> HCV (C型肝炎) 検査	／
<input type="checkbox"/> HIV抗体 (エイズ) 検査	／
<input type="checkbox"/> クラミジア検査 (抗体)	／
<input type="checkbox"/> CRP (炎症反応) 検査	／

被害の翌日、女性はセンターと連携している産婦人科の病院で検査を受けました。被害から72時間以内であれば、多くの場合、薬で妊娠を防ぐことができます。性感染症の検査や心の状態の診察も受けました。女性は、センターから紹介してもらった精神科に1年間通院。弁護士事務所にも同行してもらいました。弁護士は、会社がどのような対応をとっていたのか、聞き取りを行いました。回復した

た女性はその後、別の会社で働けるようになりました。

SARC東京 平川和子さん「どんなふうに守っていくことができるのか一緒に考えて、私たちが持っている資源（施設やサービス）につないで、つないで、橋渡しをしたい。」

しかし、全国で整備が進むワンストップ支援センターには大きな課題があります。性犯罪の多くが夜間に起きるため24時間の対応が理想的ですが、人材の確保が難しく、なかなか実現できていません。



そこで名古屋市では、24時間の対応を可能にするため、総合病院の中にセンターを作ろうとしています。救急外来のすぐ隣の部屋に、相談窓口を設置する予定です。病院の中に窓

口があることで、被害者は、いち早く治療や検査を受けることができます。さらに、性暴力にあったとは言えずに救急外来に運ばれてきた患者の中から被害者を見つけ出せる可能性もあります。センターの開設を呼びかけた、被害者のカウンセリングをしている長江美代子さんです。来年(2016年)1月の開設を目指しています。



女性と子どものライフケア研究所代表 日本福祉大学教授 長江美代子さん「妊娠の可能性とか感染症の検査もありますので、産婦人科や24時間の救急外来があることがとても大きい。できるだけ早い時期から関わって、継続してサポートしていけるのが大事。」

性暴力被害 二次被害をどう防ぐ

和久田「現在、整備が進んでいるワンストップ支援センターは、全国におよそ20か所。

国はすべての都道府県に設置することを目指しています。」

阿部「性暴力の被害者を生まないことが何よりも重要ですが、被害者を支える側であるはずの人たちからの心ない言動による『二次被害』は、一刻も早く解決しなければいけない問題です。」

少年院”経験者”たちの非行少年支援

カンテレ ワンダー 2015年7月30日

非行少年たちは厳しい環境で育ったケースも多く、いったん罪を犯すと、社会復帰して立ち直るのは容易いことではありません。こうした中で、少年院に入った経験がある人たちが集まり支えあうグループの活動が注目されています。

勝負となると力が入ります。野田詠氏さん(39)。牧師をしながら『セカンドチャンス！

大阪』の代表をしています。『セカンドチャンス！』は、少年院に入ったことがある人たちが、まっとうに生きるために支えあおうとする自助グループです。

【メンバー】「ずっと関わってくれたから、裏切ったらあかんと思った」

野田さんも、10代の頃、荒れた生活をしていました。覚せい剤にまで手を出しましたが、周りの



人の手を借りて立ち直ることができました。

【野田詠氏さん】「やり直ししているのは自分だけじゃないというのは励みになると思いま

す。自分も支えられたので、今こういう活動してるんですけど…」

【野田さん】「シャバに一年おるだけでも奇跡やもんな」

【ユキオさん】「外で大みそか迎えたの何年ぶりかなと。紅白歌合戦を笑って見たの久しぶりです」



少年院に5回入ったというメンバーがいました。母子家庭で育ったというユキオさん(仮名・22)です。

【ユキオさん】「僕ここ頭へこんでるんですけど、母が金づちでパソコンと殴って陥没骨折してへこんだままで。真冬に風呂場で水掛けられてベランダで放置されたり、フライパン熱したやつでバーとやられたり、ハサミや包丁で刺されたりとか」



ユキオさんは現在、大阪市内で友人と暮らしています。傷害事件などを繰り返し、10代の大半を少年院で過ごしました。少年院の中で『セカンドチャンス!』のを知り、社会に出た後、野田さんを訪ねたのが転機となりました。

【ユキオさん】「『セカンドチャンス!』は似た経験の子が集まっていて、虐待受けていなくても悪う。僕にとっては癒し、上手く言えないけど居場所になっていると思う」

いことしたことあるし、気持ちが通じ合



厳しい環境の中で、頼る場所もなく、自暴自棄になって犯罪を繰り返してしまう少年たちは少なくありません。犯罪白書によりますと、少年院を出た後、4人から5人に1人が、5年以内に再び少年院や刑務所に入っています。仲間がいれば、一緒にやり直せる。野田さんたちは少年院を訪ね、後輩たちを励ます活動も続けています。

【少年】「少年院に入ったことに劣等感あって、

自分には日の当たる場所に居場所無いかと思ってしまっ

【少年】「夢やり続けるのに、どうやって諦めずに済むか知りたい」

【野田さん】「一生懸命やったら応援してくれる人いるから頑張っほしい」

【少年】「同じ立場だったから自分も頑張ったらこんな風になれるのかなと」

【少年】「出院者でもいけるところいけるし、上も目指せる可能性広がっている。諦めんとこうと思った」

大阪ではほぼ毎月、『セカンドチャンス!』のメンバーや支援者が集まる交流会が開かれています。この日は、5回少年院に入ったユキオさんが司会です。

元の仲間と関わってトラブルになるケースについて話題になった時です。支援者に食って掛かったメンバーがいました。



【ジンさん】「普通普通って聞くけど普通って何なんですかね」

【支援者】「犯罪に縁のない世界」

【ジンさん】「普通に生きようと普通の社会だと思って出ました、でもそこでわけのわからんトラブルに巻き込まれます、それで守ってもらいたい気持ちが出て上の人に頼む、そういうことってあるんちゃ

います?」

少年院から先月出たばかりのジンさん（仮名・20）です。ジンさんか抱く違和感や疎外感…。ユキオさんにも経験がありました。

ユキオさんは、周りの人とモメては仕事を止めるというパターンを繰り返していました。『セカンドチャンス！』の支援者が用意してくれた面接もすっぽかし、約束をしても現れない日が重なるようになりました。電話が通じなくなり、ユキオさんとの連絡が途絶えました。

【野田さん】「彼の場合、過去のトラウマが影響しているので、無意識のうちに後ろに引張られる力が強いと思う。意味のないすっぽかしもそうなんですけど、自分も失敗して自暴自棄になりそうでも、それでも社会で頑張ろうとしている。今は見守りたいと思っていますね」



次の交流会の日。少し照れたような、ユキオさんの姿がありました。

【支援者】「ずーっと心配してた」

【野田さん】「髪の毛伸びたな」

野田さんもさりげなくユキオさんを出迎えます。前に支援者につっかかっていたジンさんが、この日、自分の過去を話し始めました。

【ジンさん】「(母親から)一番自分が嫌われてたみたいで、自分だけほったらかしされて、腹立ってガラス蹴り割ったらその日から玄関暮らし始まって、飯も殆ど食わせてもらえないようになって。どこにも居場所ないし、ずっとミナミほっつき歩いて犯罪してはクスリやって、そんな時、居場所やなと思ったのが暴力団組織だった」

【ユキオさん】「ほんまそんなん(ヤクザに)ならへんと決めてるのか、なりたい気持ち半分で葛藤してるのか？」

【ジンさん】「なりたい気持ちも…」

【ユキオさん】「なんでなりたい？」

【ジンさん】「居場所と思ってた。金で人を買えるじゃないですか。周りからは馬鹿にされるかもしれないけど、自分ずっと一人だったから、余計、金で人を買えるなんてそんな楽なことないと思ってたから」



暴力団に戻るか、今も揺れているというジンさん。

そんなジンさんが、ユキオさんには笑顔を見せていました。

【ユキオさん】「服装はどなんが？」

【職員】「スーツがあればスーツが一番」

ユキオさんは、就職活動を始めました。きちんと仕事について、野田さんたちに報告すると決めています。

【ユキオさん】「正直、モメたらどついたらか、という気持ちが無いわけでは無いし、それを抑えているのは野田さんや、支えてく



れてる人。僕が救われたように僕が誰かの希望になれば。僕にしか伝えられないことがあるはずだから」

一度は道を踏み外した若者たちです。今、手を取り合って、新たな一歩を踏み出そうとしています。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行